

新緑の候 皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜びします。
さて、今年度もコロナ禍の中、大勢が集まっての会議が危険ですので本文書をもって紙上講習会とさせていただきます。
以下の文書が今年度講習会の要点ですのでご覧おきください。
審判講習会資料にはパワーポイントによる映像の資料があります。USBがあればコピーできますので必要な方は大会時に準備しておいてください。審判部の小野寺、水谷先生、木下さんが資料を持っています。

研修1 審判員の心得10箇条

① リーダーシップ(Leadership)

レフェリーはゲームを管理・運営していく指揮者でなければならない。モダンハンドボールの考え方を踏まえ、カテゴリーに応じて、必要な笛は吹きながらも、無駄な中断をさせず、試合をスムーズに進めていくことが求められる。また、「ボディランゲージ」を用いて、チーム・監督に基準等を明確に伝える努力を怠らないこと。そのためには、指揮者として選手にどのようなゲームをさせたいかというハンドボール感あるいはハンドボール理念を持たなければならない。

② 誠実さ(Honesty)

レフェリーは誠実でなければならない。勝敗の行方がどうであっても最善を尽くし、ひとつひとつを丁寧に、特に初心者のプレイほど丁寧に吹笛する必要がある。

③ ルールに関する知識(Knowledge of the Rule)

ルールを熟知していること、さらにその根底にある意図・思想を理解すること。特にルールが変更した際には、その変更の根拠を的確に把握すること。スポーツの考え方として反則された者が不利に、反則した者が有利になってはならない。

④ 冷静さ(Firmness)

レフェリーは感情的になってはならない。レフェリーは瞬間、瞬間に冷静で適切な判断をし、穏やかに振る舞う必要がある。常にゲームの流れ、雰囲気を感じながら、信念を持ち、毅然と判定しなければならない。

⑤ 正しい判断(Good Judgement)

よく観察し、はっきり確認したものだけを判定する。決して予測で吹笛してはならない。アドバンテージルールがあるので、見た全てを判定するのではなく、プレイが発展するかどうかを見極めなければならない。発展性がないプレイに関して、カテゴリーによっては早めに笛を吹くことも大切となる。

⑥ 身体上の適正(Good Fitness)

素晴らしい笛(タイミング、判定基準)は、良い位置に素早く移動して、適切に判定することから生まれる。「We must run, too」と IHF レフェリーも言っている。日々のトレーニングを怠ってはならない。

⑦ ユーモアのセンス(Sense of Humor)

ユーモアはなくて困るものではないが、もしも、選手を罰するとき微笑を持ったなら、あなたの温かい心(ともに試合を作り出そうとする人間性)が相手に伝わるはずである。

⑧ 勇気(Courage)

監督・選手が恩師や先輩であっても、ルールはルール。たとえ罰則であっても勇気を持って公平、的確に判定しなければならない。

⑨ 協調性(Cooperation)

競技場には二人のレフェリーペアがいることを常に意識しなければならない。また二人しかいないことも忘れてはならない。そのため、二人で力を合わせ、協調しながらゲームを運営しなければならない。チーム・競技役員・補助役員からの協力がないとゲームを運営できないことを心得ておくこと。

⑩ 仲間意識(Fellowship)

協調性とほぼ同じであるが、ハンドボールを支える様々方々の存在に気づき、その存在を認めること。そしてゲームや大会が終了した後、お互いを褒め称えることも忘れずに。

研修2 『コンタクトプレーを正しく見極める』(昨年度より継続)

ハードプレーとラフプレーの見極(レフェリングの際のポイント)

① ボディーコントロールは? もしも、ボディーコントロールを失わずにプレーできているならば…

- ◆ ゲームの流れを重視
- ◆ 安易に競技を中断しない→ 7m スローの判定や罰則の適用 などにより

② プレーヤーへの影響は?

- a) 違反行為をしたプレーヤーの位置 …相手に対して、正面?側面?後方?
- b) 違反行為が対象とした 身体の部位 …胴体?シュートしている腕?脚?頭部?喉?首?
- c) 違反行為の激しさの程度 …接触の強度は?相手の動きの速さは?
- d) 違反行為の影響

③ ボールに対するプレー?

- ◆ ボールを対象としていない
- ◆ 不利な位置から接触をした(横、後ろから) ⇒ ラフプレーとして判定(競技規則8:2、8:3)

即座に2分間退場とすべき違反行為(8:4)開始直後でも、即座に2分間退場もありうる!

- a) 衝撃の大きい違反行為や、高速で走っている相手に対する違反
- b) 相手を背後から捕まえ続けること、あるいは引き倒すこと
- c) 頭や喉、首に対する違反
- d) 胴体やボールを投げようとしている腕を激しく叩くこと
- e) 相手が身体のコントロールを失う行為をしようとする(例:ジャンプ中の相手の脚をつかむ。8:5a)
- f) 高速でジャンプして、あるいは走って相手にぶつかること

これからのレフェリーの役割

前半のうちに基準(許容範囲)を示す(インフォメーション、ボディランゲージ、段階的罰則を用いて)
⇒ 後半に罰則を適用する必要がないようにする。(適用する準備は必要)

研究課題 モダンハンドボールの考え方については、各連盟、カテゴリーの実態に応じて適用

- ・得点の後やGKスローとなった際、又は前半終了間際からのイエローカード×(口頭で伝え時間を止めない)
- ・チームで3枚のイエローカード など
- ・ゲームの流れを優先し、笛の数を減らす。ゲームを止めない。
- ・怪我をしたプレーヤーへの対応 『助けが必要ですか』(大丈夫ですかは×)
- ・ゴールキーパー不在の状況での攻撃(特にターンオーバー時)
- ・「怪我をしたプレーヤーが倒れていた(怪我ではないが倒れていることも含む)場合、速攻やクイックスローオフを中断させてはならない」という考え方が、チームに浸透していない。
- ・モップのタイミング(反対側で攻防が行われている際に拭くことを原則とする)やボール交換(安易に交換しない)
- ・シニア、大学のレベルでは、罰則(警告:イエローカード)の適用で、得点を取られた後のクイックスローオフやゴールキーパーパスローを中断させてはならない。
- ・退場に相当する場面はモダンハンドボールの考え方であっても退場の判定をする。
- ・コーチ、プレーヤーとのコミュニケーションの取り方
判断基準をもとに判定の根拠を、適切に口頭で説明できるようにする
- ・ボディランゲージ(Body Language)の仕方
プレーヤー、コーチ、観衆になぜそう判定したのかが伝わるように
- ・ゴールエリアライン際の判定は、全てゴールレフェリーが判定できるようにする。
ただし、ゴールエリアライン際のピボットの攻防は、ゴールレフェリーとコートレフェリーが連携し、管理する。
- ・ユニホームをつかむプレー→ゴールレフェリーとコートレフェリーが連携
- ・ウイングプレーヤーへのディフェンス 『Long step』と『Foot on Foot』
 - ①シューターが先に足を踏み込む動作。
 - ②その後、DFが足を前に踏み出した。『Long step』
※シューターにはもはや踏み込んだ足を どうすることもできないと考える。→先にその位置を取ったのはシューター
 - ③『Foot on Foot』の状況となる。
 - ④シュートが外れれば7mTの判定。
 - ⑤得点を決めたとしても、少なくとも2分間退場の判定。→シューターに大きな影響があれば、失格。

その他

「2021年度審判員の目標」「各級公認審判員の目標」等は日本ハンドボール協会HPで確認してください。
競技者・関係者むけ(右上)→競技・審判→競技規則→レフェリーハンドブック2021-2022